

モジュール型教材による中級後期日本語教科書開発プロジェクト 実践報告 (2015)

高屋敷真人

宮内俊慈

要旨

本研究は、2014年度の関西外国語大学国際文化研究所（以下 IRI）のプロジェクト研究助成を受け、IRI 共同プロジェクトとして認定され、以後、継続して行われているものである。本プロジェクトの主旨は、関西外国語大学留学生別科の日本語会話レベル 6（中級後期）の教科書開発プロジェクトとして中級会話用の「モジュール型教材」を作成し 2015 年度秋学期（8 月～12 月）と 2016 年春学期（1 月～5 月）での試用を目指したものである。昨年度は、アンケート調査や授業評価の結果を分析し第一課（ユニット 1）と第六課（ユニット 6）の本文の改訂を行い、大きな成果を生んだ。

【キーワード】 中級日本語会話、自律的学習、学習者主体、モジュール型教材、接触場面、

1. はじめに：理論と背景

関西外国語大学留学生別科では、2008 年度秋学期（9 月～12 月）に中級後期会話クラス（日本語会話 6: Spoken Japanese 6、以下、SPJ6）を新設し、そのメインテキストとして、モジュール型教材の開発プロジェクトが新たに始まった。新教科書は、筆者（高屋敷）が執筆を担当し、毎学期、新しく作成されたモジュール型教科書の試用を続けている。このプロジェクトは、2014 年、IRI の共同研究プロジェ

クトの一つに採用され、以後、二年間にわたり、学生へのアンケート調査を行い、その結果に基づき教材の開発、改訂を続けている。

本学の日本語会話コースのレベルは下記のように設定されているが、SPJ6 は中級後期のレベルに該当し、最終的に日本語能力試験 N2 レベルの合格を目的としたコースである。

初級：SPJ1～SPJ4

中級（日本語能力試験 N2 レベル）：SPJ5（中級前期）と SPJ6（中級後期）

上級（日本語能力試験 N1 レベル）：SPJ7

アカデミック（日本語能力試験 N1 レベル以上）：SPJ8

中級後期の新テキスト開発にあたっては、「モジュール型教材」「学習者主体」「自律的学習」「接触場面」といったキーワードに代表される教育理念のもと、「接触場面」(ネウストプニー 1995:186-206) や「モジュール型教材」(岡崎 1989:34) という教育理念に沿うように開発が始められた。ネウストプニーは、接触場面について、下記のように定義している。

外国人話者が日本語とはじめて接触するのは、ほとんどの場合、「接触場面」（「外国人場面」ともいわれる。）の一ケースの教室場面であるし、その後の数年間、接触場面しか参加しないであろう。外国人が、母語話者によって、「準母語話者」として認められないかぎり、彼らの参加する場面は、接触場面なのである。この接触場面は、「母語場面」（話し手のすべてが母語話者）とは、かなりの点で異なった特徴をもっている。したがって、今までの語学教育において、母語場面しか教育の目標にしてこなかったのは、あまり現実的な態度ではないといえるであろう。(ネウストプニー 1995:187)

このようなネウストプニーの指摘を受け、本学の SPJ6 で学ぶ学生の殆ども、アメリカ、ヨーロッパからの交換留学生であることを鑑み、関西で日本語を学ぶ英語圏を中心とした欧米系の学習者の接触場面とすることを常に念頭に入れ、開発を行うことにした。また、SPJ6 は、中級後期のレベルであるので、このレベルの学

習者が会話の中で、表現の問題に直面した時、「その問題（障害）を、日本語らしさを失わずにどう処理できるか」（ネウストプニー 1995:202）ということ常を本文や練習の会話に盛り込むことにした。ネウストプニーも指摘するように、この種の能力が「接触場面から準母語話者に移るために大切なもの」であることは言うまでもないであろう。本プロジェクトは、まず第一に、上記のように、常に本学交換留学生の「接触場面」を念頭に、実際に彼らが自分の日常で遭遇するような実践的な場面にこだわり、教室内と教室外の言語活動が乖離しないように配慮し、学習者にとってよりコミュニカティブな学びの場を提供することを目指している。詳しい経緯については、拙論、「モジュール型教材による中級後期日本語教科書開発プロジェクト」（高屋敷真人 2012:119-133）にまとめてあるので、ここでは割愛する。

日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチに関しては、1991年に西口が「コミュニカティブ・アプローチというものを整理し、伝統的アプローチとコミュニカティブ・アプローチを融和していくための筋道を提案」してから「日本語教育の方法の原理に関する議論・論争が途絶えて」いるのではないかと述べ、西口自身が問題の再提起を行っている（西口 2012: 8-23）。1991年以降、コミュニカティブ・アプローチの理念を応用し、「タスク中心の指導」「モジュール型教材」「学習者ストラテジー」「リソース型教材」などのキーワードに代表される新しい方法も模索され、「自律学習」、すなわち、学習者が学びたいと思うことを自ら選択し自発的に学べるような学習者を中心に見据えた言語教育を目指した様々な試みがなされて来ているが（岡崎他 1990:67-182; 伴 2003:261-270/2009:2-11; トムソン木下 2009:17-25 など）、そのような試みを整理し再評価し、教育の現場で活かしていく必要があるだろう。コミュニカティブ・アプローチは、一つの決まった教授法（メソッド）ではなく、様々なアプローチの総称であるので、既存の教授法の中でいかにバランスよく、文法形式の定着とコミュニケーション能力の養成を図っていくかが重要になってくる。また、Nunanは、近年、教室活動を離れた教室外での言語学習（out-of-class learning）において、学習者が自律的に自ら学習する機会を提供するような活動の重要性を説き、教師の役割は、インストラクター（指導者）というよりファシリテーター（促進者）で、学習者は、自らのニーズと興味関心に基づき自ら表現したいことを手助けして行く存在であるべきだと提唱している。（Nunan

2015:xi-xvi) 本プロジェクトでは、これらの問題提起、提案を受け、教室内活動をできるだけ教室外活動に近づけること、学習者オートノミーをできるだけ促すことを開発の支柱とし開発を続けている。以下、昨年以降、教材開発と改訂作業がどのように行われて来たかについて述べていきたい。

2. 中級用教材としてのモジュール型教材の利点

モジュール型教材とは「教科書のように特定の順序に沿って一つ一つの課を学習するタイプの教材とは違い、学習者が既に学習し終わっている項目から一定程度独立して使えるようにした教材」である。(岡崎 1989:34) 岡崎は、「コースの早い段階で構文シラバスの教科書との進行とは別に生起して来る学習者のニーズ」に着目しているが、モジュール型教材とは、つまり、「通常の教科書が順序を無視して使うのが難しいのに対して、学習者のニーズが新たに生起したその時点においてそのニーズに合わせた形の活動を実施するような使い方を可能」(岡崎 1989:34-35)にさせるものである。

岡崎は、モジュール型教材を「コースデザインの柔軟化」を可能にするものの一つとして挙げているが(岡崎 1989:34-35)、2008年にSPJ6のための新しい教科書開発プロジェクトを立ち上げた際には、この提案を取り入れ、

- ① SPJ6は中級後期レベルであり、媒介語を使わず日本語のみでのコミュニケーションがある程度可能なレベルであるので、中上級レベルでの学習項目(文型)の提出順序を積み上げていく必要がない
- ② 常に変化流動する学習者のニーズに柔軟に対応できる

というような観点から、学生のニーズに合わせて柔軟にシラバスが変更できるモジュール型教材が適しているのではないかと判断した。最近の本学で学ぶ交換留学生を観察すると、1980年代後半から90年代にかけては、ビジネスが主眼の学生が多かったのに対し、昨今の交換留学生の来日の動機は多岐に渡り、彼らのニーズも専門化、細分化、いふなればオタク化してきているように感じる。学習者の興味関心は、タコツボのように個別化して来ており、自分の好む物に対しては非常に専門的な知識を有するが、そうでない物には無関心で全く興味を示さないといった傾向も

多く見られる。また留学生の興味関心が流行に合わせて流動化するスピードも以前とは比較にならない程早く、時間をかけて作成した会話教材も、翌年には全く時代遅れになっていることも多々ある。しかし、モジュール型教材であれば、情勢の変化に伴う学習者のニーズが新たに生じた時点で古くなった箇所のみ簡単に取り換え可能であるので、この点にも柔軟にシラバスを変更し対応できるのではないかと考えた。

2008年に作成された新しい教材では、本学の留学生へのニーズ調査の結果から、できるだけ話題が偏らないように留意しつつ、各ユニットのトピックを下記のように決定した。

Unit1 Mixi って何？

Unit2 交通機関のマナー

Unit3 夫？主人？

Unit4 ユニクロ、MUJI は海外で成功するか？

Unit5 インターネットは人類を幸せにしたか？

Unit6 急増する外国人雇用

ユニット1は、当時大流行し始めていたSNS「ミクシィ」について取り上げた。本学の70～80%を占める米国からの留学生はほとんどFacebookに加入しており、それとの比較でディスカッションも盛り上がったという経緯があった。ユニット2は、欧米と比較して、携帯電話の使用に厳しい日本の電車やバス内でのマナーについて取り上げた。ユニット3は、ジェンダーや性差別の問題について、「夫に仕えているわけではないのに何故いまだに主人／ご主人というような呼称の使用が許されているか」などがいいディスカッション・ポイントになった。ユニット4では、国際ビジネスなどを専攻している学生にも考慮し、世界的成功を収めた自動車や電子機器以外の日本企業について話し合えるようにした。例えば、国内で成功を収めたファストファッションのユニクロなどが海外でも成功できるかという点について議論できるようにした。ユニット5は、インターネットに潜む危険性、例えば、情報管理、監視社会、ネット中毒などの問題などについて取り上げた。ユニット6は、日本の少子化問題、それに伴う若い労働力の不足を補うための「外国人労働者の移

入問題」について取り上げた。

本プロジェクトで作成した教科書のユニット（モジュール）は1から6まで順番に並んでいるが、この順番通りに学習して行く必要はなく、その時々の学習者のニーズ、国内外の時事問題の変化に応じ、どのユニットからでも学習することが可能である。であるので、学習者のニーズが新たに生じた時点、あるいは世界や国内の情勢、流行などに変化が起きた時点で随時取り替えが容易に行えるという利点がある。例えば、2008年、新教科書を使用し始めた直後、リーマン・ショックによる金融危機の影響で、ユニット6のトピックである「急増する外国人労働者」という本文がすぐに時代に合わないものになってしまったが、即座に改訂を行い、翌年2009年春学期は、ユニット6の本文の内容をフィリピンやインドネシアからの看護師や介護士の就労問題に焦点を当てたものに変更し、「外国人労働者、受け入れますか？」というタイトルに書き換えて、ユニット6のみ差し替えを行った。また、2008年以降、Mixiの登録方法が招待制からウェブ登録制になる、「足跡」機能が廃止されるといった変更があったのであるが、その都度、本文の該当箇所を訂正した。これも1冊の教科書を買わせるという体裁ではない「モジュール型教材」であったからこそ可能であったように思う。2008年にこのプロジェクトを始めた頃、大流行していたMixiもこのところ人気が下火になり時代に合わないものになってしまったので、それに代わるツールとしてLINEが大流行していることに注目し、2014年秋学期の前には、ユニット1の本文のトピックをMixiからLINEに改訂する作業を行った。

3. 日本語会話6（SPJ6）のコース概要

SPJ6は、学習者が自ら各ユニットのトピックについて、毎週5コマの50分授業で、日本語でディスカッションを行うことを最終目的とし、そのために学生自身がディスカッションのための文献や資料を自分で探し出し調べ、ディスカッション・ポイントも自分で考え、ユニットごとに順番にディスカッションの司会を行えるようにコースが設計されている。各ユニットのディスカッション・リーダーは、学期始まりの最初の週に、クラスで学生同士が自由に話し合っ、各自好きなトピックを選び担当者を決定できるようにした。

1週間で一つのユニットを終えるわけだが、1コマ目と2コマ目のクラスでは、各ユニットの文型を用いた会話練習、3コマ目が語彙テストと語彙表現練習用シートを使用した作文練習を行っている。4コマ目で、本文会話の練習を行い、5コマ目でトピック（本文内容）についてディスカッション・リーダーがディスカッションを行うようにしている。リーダーは、まず、クラスで15～20分くらいで、なぜこのユニットのトピックについて話したかったのかを説明し、ディスカッションのポイント（テーマ、内容、背景など）について調べてきたことを説明する。その後、自らが考えてきたユニットのトピック（本文内容）についてのディスカッション・ポイントについて最終的にクラスで意見を聞き、話し合いを行うことになっている。ディスカッション時は、教師はできるだけ余計な介入を避け、一参加者として加わり、クラスの主導権はすべてリーダーに一任するようにしている。この方法は、学生の積極的なクラス参加、発言回数の増加などに効果があったように感じている。この方式を採る以前、教師がディスカッションの司会を行うと、時に間違いなどを恐れたり、妙に構えてしまったりして積極的に発言しない学生がいることは否定できないことであった。しかし、教師主導ではなく、学生主体でクラスメイトがディスカッション・リーダーになった場合、普段の文型練習、会話練習時にはおとなしくあまり手を挙げない学生がトピックによっては突然意見を言い始めたりすることもあり、皆の前で発言するハードルが下がる効果があるのではないかと感じている。

4. 2014年度 IRI 共同プロジェクトの成果

昨年の共同プロジェクトの一環として、2014年の秋学期にはSPJ6の担任であった筆者（宮内）によるアンケート調査が行われた。アンケート調査は、2014年の10月22日から一週間の予定で行った。この時期は、留学生別科の中間試験が終了した時期で、SPJ6のクラスでは、ドラマを除く全6ユニットの内ユニット4までが終了しており、その4ユニットに関する学生の評価を収集した。この学期には、SPJ6の学生は、全部で35名（男子学生13名、女子学生22名）おり、その内20名（男子学生6名、女子学生14名）の学生がアンケート調査に応じた。

この学期の前に変更を行ったのはユニット1で、トピックをMixiからLINEに変

えた。Mixiの時のデータがないので比較することはできないが、この時に調査を行った4つのトピックの中では、トピックへの関心、ダイアログの良否の評価ともかなり高い評価を得ることができた。まだ1学期だけの結果であり、データもわずか20名のものであるので結論付けることは早急であるが、成功裏に改訂が行われたと言ってよいと思われる。今後とも調査を継続してデータを集積して行く必要があるだろう。詳しい調査内容と結果報告については、本学留学生別科日本語教育論集に「モジュール型中級後期教科書の学生による評価」(宮内 2014:49-69)と題して掲載されているので、参照していただければ幸いである。

5. 2015年度 IRI 共同プロジェクト実践報告

昨年度のユニット1の改訂に引き続き、本年度は、ユニット6の改訂作業を開始した。候補として、昨年度のアンケート調査で、比較的に学生からの面白さの評価が分かれたユニット4「ユニクロ、MUJIは海外で成功するか?」、そして、コース担任(宮内)が内容の難易度と学生の興味という観点から改訂の必要性を感じていた、ユニット6「外国人労働者、受け入れますか?」の二つが挙げられた。学生へのアンケート調査の分析を検討した結果、ユニット4は、ビジネスに関することで、トピックの面白さに関しては評価が拮抗していたが、内容に関しては高く評価されていることを踏まえ、今回は残すことに決定した。ユニクロは、2008年から変わることなく、留学生をはじめ、日本を訪れる外国人にもその人気を保っていることも考慮に入れた。

ユニット6は、少子化に伴う日本の労働力不足を補う策としての外国人労働者の受け入れ問題を扱っていたが、世界各国の移民の労働問題、あるいは、ブラジル日系人の肉体労働の問題、フィリピンやインドネシアからの看護師、介護士の受け入れ問題など、ディスカッションのトピックとしては様々な議論が期待できるいいトピックであったが、留学生の日常とは少々かけ離れている内容であったため、今一つ、留学生の反応が悪かった。そこで、より本学留学生の興味関心に沿うものとして、日本の就職活動事情と外国人留学生の日本での就職活動について新たに本文を書き直すことに決定した。

2015年春学期が終了してから、夏休みの期間を利用し、改訂作業を進めた。昨今、

外国人留学生を対象とした有給のインターンシップを行う日本企業が増加しており、本学でも昨年から留学生を対象としたインターンシップが始められていること、日本人学生のみならず留学生対象の就職サイトが増えていることなどを考慮して、本文の内容を考えた。また、アメリカ人留学生が日本人学生の就職活動について、本学の学生が3年次に急にスーツを着用し、髪を黒く染め直すことを目の当たりにし、「なぜ一斉に同じ髪型、服装で活動が始まるのか？」等、授業後、質問して来ること度もあったので、アメリカの大学生の就職活動の様子も含め、内定を求めて奔走する日本人学生と比較した内容も盛り込むことにした。出来上がった本文をもとに、新しいユニット教材を作成し、2015年秋学期のメインテキストとして試用を行った。

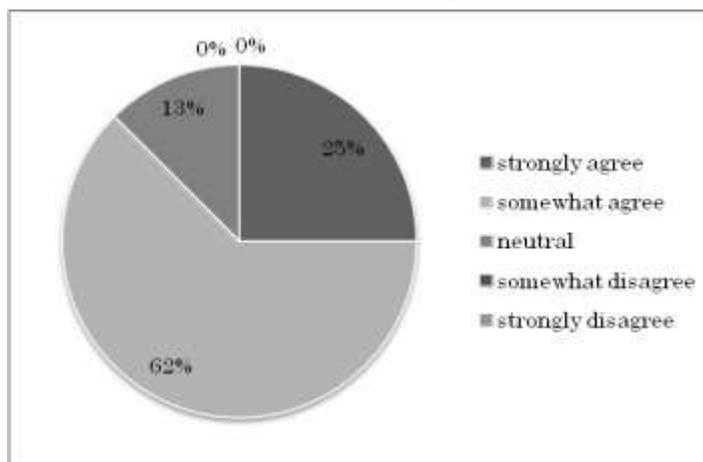
6. 2015年秋学期のアンケート調査の結果と今後の展望

今回のアンケート調査は、2015年の秋学期のSPJ6のユニット6が終了した後の授業時間の最後の15分程度を使用し行った。この学期には、SPJ6の学生は、全部で26名（男子学生13名、女子学生13名）おり、その内24名の学生のデータを回収することができた。調査項目としては、教科書全般に対する評価と各ユニットに対する評価を尋ね、全調査項目の数は87であった。全体的な質問としては、「教科書(Packets)は全体的にいいと思う」かどうか、今後「取り上げて欲しいトピック」は何か、さらに、SPJ6の教科書に対する「Free Comment」を尋ね、ユニット毎の項目としては、「トピックは面白いと思う」かどうか、ダイアログの内容、長さ、難しさ、語彙の多さ、難しさ、練習内容、表現説明の内容、聞き取り練習の内容など15項目に渡って詳細に尋ねた。詳細に関しては別途報告する（宮内 forthcoming）。

ここでは、それらの項目の内、教科書全体に対する評価と各ユニットのトピックに対する興味の比較とダイアログに対する評価の比較に絞って述べる。

まず、教科書全体についての評価であるが、図1の結果となった。“strongly agree”と“somewhat agree”を合わせると、87%の学生、つまり、24人中21人が「良い」という評価であった。一方、“strongly disagree”と“somewhat disagree”の回答はいずれもゼロで、総数24名の評価とは言え、SPJ6の教科書がかなりの好意を持って評価されていることがわかる。

図1「教科書は全体的にいいと思う」に対する賛否



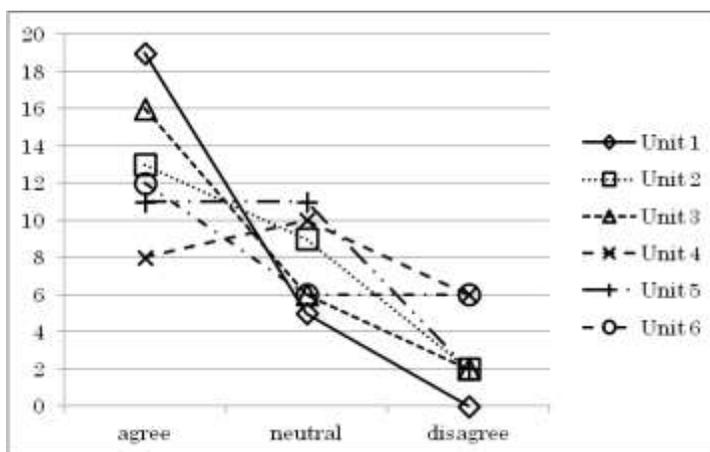
ユニット毎の比較では、まず、それぞれのトピックの面白さについて尋ねた（図2参照）。このグラフでは、“strongly agree”と“somewhat agree”を合わせて“agree”とし、“strongly disagree”と“somewhat disagree”を合わせて“disagree”としている。

このグラフを見ると、全てのユニットにおいて“agree”が“disagree”を上回っているが、特に、ユニット1（“agree”が19人（79.2%）で“disagree”が0人（0%）とユニット3（“agree”が16人（66.7%）で“disagree”が2人（0.1%））に人気があることが分かる。ユニット1は「LINE、やってる？」というタイトルで、2014年の秋学期に入れ替えたトピックである。前回の調査（宮内 2014）においても二番目に人気の高いトピックであったが、今回も高い人気を集めた。やはり、現在の大学生においては日本人学生であれ、留学生であれ SNS についての関心が高いことが伺える。また、ユニット3は、「夫？主人？」というタイトルでジェンダーに関するトピックである。前回の調査では、このトピックに対する人気はそれほど高くなかったが、今回は高い関心を集めることになった。学生たちがディスカッションで取り上げるトピックとしては、最近日本でも注目を集めメディアでもよく取り上げられる LGBT の問題があるが、それに関連したジェンダーについてのトピックは学生たちが取り組みやすい身近なトピックであったのかもしれない。

一方、ユニット4は、「ユニクロ、MUJI は海外で成功するか？」というタイトルで、日本式ビジネスに関連するトピックであったが、“agree”が“disagree”を上回っ

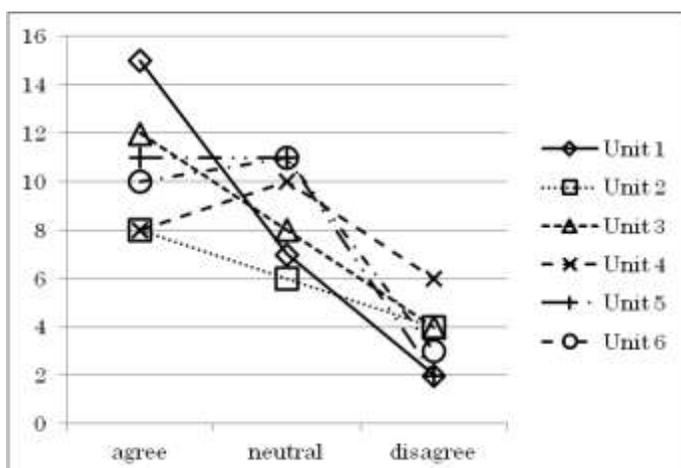
たものの“agree”が8人（33.3%）で“disagree”が6人（25%）という状況で、あまり人気のないことが伺える。このユニットは、前回の調査でも調査対象となった4つのユニットの中で最下位の人気であったこと、また、ユニクロが既に世界的にある一定の評価を得ており、実際の状況と比較して内容的に合わなくなっていることから、トピックの変更をすべき状態と言えるかもしれない。

図2「トピックは面白いと思う」に対する賛否の比較



次に、ダイアログの内容の良し悪しについての評価を比較してみる。ここでも、どのユニットにおいても“agree”が“disagree”を上回っており、同じくユニット1とユニット3の評価が高い。そして、ユニット4に関しては、「トピックのおもしろさ」についての評価と同様に、“agree”が8人（33.3%）、“disagree”が6人（25%）で全6ユニット中で最も評価が低かった。関心度の低さ、内容に対する評価の低さの2つの点から言って、やはり、ユニット4は、次回のトピック改訂の対象だと言えよう。

図3「ダイアログの内容はいいと思う」に対する賛否の比較



今学期、変更を行ったのはユニット6で、タイトルが「外国人労働者受け入れますか？」から「就活って、何？」に変わった。トピックとしては、日本における外国人労働者の問題から、大学生の就職活動に変わった。前回の調査では、ユニット4を終了した中間試験の段階でアンケートを実施したため、変更前との比較をすることはできないが、今回の調査では、関心度（“agree”が12人（50%）、“disagree”が6人（25%））、内容の良否に対する評価（“agree”が10人（41.7%）、“disagree”が3人（12.5%））ともにまずまずの成績を納めているように思える（図1、図2参照）。まだ1学期だけの結果であり、データもわずか24名のものであるので早急な結論付けは危険であるが、ユニット6のトピック改訂は成功だったと言ってよいと思われる。とは言え、全ての点で、SPJ6の PACKET が良いと評価を受けている訳ではなく、ダイアログの長さや単語数の多さなど、学生から幾つかの問題点を挙げられている（宮内 forthcoming）ので、小さな改訂作業は継続して行っていく必要があるだろう。

今後取り上げて欲しいトピックの中には、「日本食ブーム」のせいなのか、“cooking”を挙げる学生も4名ほどいた。また、近年、日本だけでなく全世界において異常気象や大災害が頻発しているせいか、“natural disaster”に関する関心も高かった。さらに、関西外大が関西エリアにあることから、関西弁を取り上げて欲しいという要望も見られた。これらのトピックを含め、学生のニーズと世界情勢、日本情

勢を鑑み今後共新しく取り込んでいくトピックを検討していく必要があると言える。

参考文献

- 岡崎敏雄 (1989) 『日本語教育の教材』 アルク
- 岡崎敏雄・岡崎眸 (1990) 『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』
凡人社
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉 編著 (2003) 『日本語教師のための知識本シリーズ③
人間主義の日本語教育』 凡人社
- J.V.ネウストプニー (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- 高屋敷真人 (2011) 「学習者主体のディスカッションによる上級読解授業の実践—
学習者が読み物教材を選べる上級読み書き授業—」 『関西外国語大学留学生別科
日本語教育論集』 21号 pp.15-35.
- 高屋敷真人 (2012) 「モジュール型教材による中級後期日本語開発プロジェクト」
『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』 22号 pp.119-133.
- 田中望・斉藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』
大修館書店
- トムソン木下千尋 編 (2009) 『学習者主体の日本語教育 オーストラリアの実践研
究』 ココ出版
- 西口光一 「『教育』分野—日本語教育研究の回顧と展望—」 『日本語教育』 153号
pp.8-23.
- 伴紀子 (2003) 「学習ストラテジーは学習の過程でどのように変化するか」 宮崎里
司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育 ネットワークのインパ
クト』 明治書院
- 伴紀子 監修・宮崎里司 編著 (2009) 『タスクで伸ばす学習力 学習ストラテ
ジーを活かした学びの設計』 凡人社
- 宮内俊慈 (2014) 「モジュール型中級後期教科書の学生による評価」 『関西外国語大
学留学生別科 日本語教育論集』 24号 pp.49-69.
- 宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育 ネットワークのイン
パクト』 明治書院
- Nunan, D. and Richards, J C. ed. (2015). *Language Learning Beyond the Classroom*. New
York and Rondon:Routledge.

宮内俊慈 (Forthcoming) 「モジュール型中級後期教科書の学生による評価 (2)」『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』25号.

mtakayas@kansai-gaidai.ac.jp

smiyauc@kansai-gaidai.ac.jp